

わたしの聖戦

◎◎女性が働くということ◎◎76

医学ジャーナリスト・医学博士 植田美津恵

だます人々と社会

高校生のころ、作文に「世のなかには実に色々な人がいるものだ」というようなことを書いて、担任教師に「いぶん褒められた覚えがある。たぶん、はじめてアルバイトを経験し、そこから得た率直な感想を綴ったものだったと記憶している。」

あれから30年以上が経過し、その思いはますます強くなってきているのだが、微妙にニュアンスが違ってきたのを自覚している。「世のなかには他人をだまして生きている人が実に多くいるものだ」とつくづく感じるようになったからだ。もっともわかりやすいのが昨今話題の「振り込

心理学の分野では、平気でうそをついたり人をだましたりする人をサイコパスとか精神病質と呼んでいるが、人のこころを学問上で論じている間に、現実はずっととらえどころのない不安な状況になっていくようだ。

一日の被害総額が
7,500万円だということから……



作り上げ、次々に職場を変え、後押しするかのようなきは何と呼べばいいのだろうか。よほどの能力やスキルや精神力がなければ、転職をしても意味がないことは少し考えればわかるのに、転職するのはいま風で、

ひとつの職場にいることは時代遅れでかつこ悪いかのようにしきりに煽ってきた社会は、詐欺でなければ何と呼ぶのがふさわしいのだろうか。

しかも、振り込み詐欺のように、犯罪の枠で語ることが可能なものばかりではない。たとえば「転職ブーム」はどうだろう。いかにも転職がカッコイイというイメージを先行させ、それっぽい会社やサイトを

「派遣」も同様である。自分の好きなときにだけ働けばいいと甘い誘いの文句をかけた、人間のなまけ心に油を注ぐ風潮を作り上げ、間違った価値観を拡大させてきた社会や企業は、「だまし」ではないとしたらいいのだろうか。

詐欺はだますほうも悪いが、だまされる側にも非があるという。確かにそうかもしれない。しかし、だましの手口はひと昔よりさらに巧妙で複雑、かつ悪質になっている。しかも、人間の手によるものではなく、社会や企業や時代という巨大な相手が、結果的に国民をだましていくという事実が、あちらこちらに見え隠れし、こうなったら人をだまして生きてやると思わなければやっていけないような社会を作ってしまった。

あの作文を褒めてくれた教師は、とつくにこの世と縁を切ってしまったが、もしかしたら社会の入口に立ったばかりの私に「だまされるな」と教えたかったのかもしれない。そう思うと、彼の飄々としたまなざしが今さらながら懐かしく、切なく胸に迫るのである。

イラスト・三浦義雄